

「高井」二十四号別刷

中野市立ヶ花表山古窯地調査

中野市教育委員会

中野市立ケ花表山古窯址調査

金井 汲 次

昭和四四年一月七日所用のため、立ケ花の穂崎神社裏から篠井川へ通ずる農道を歩るきはじめると、左手の高台に古窯址の半壊されたのを発見した。永井本店の採土地で、ブルトーザーが粘土を採った跡に二基の古窯址があった。

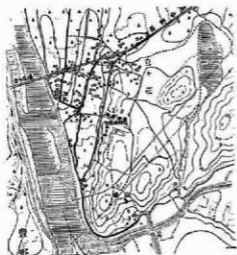
ただちに中野市教育委員会へ報告した。市教委は地主北原菊吉氏（立ケ花）へ発掘の了解を求め、また、永井本店とも交渉をして、緊急発掘調査を実施することとなった。冬期は積雪のため調査ができなため、雪解けの春まで待つことにし、永井本店では、それまで採土を行わないとの了解がいった。

中野市の西端には丘陵が細長く横たわって、これを高丘丘陵と呼んでいる。そしてこの丘陵の中に小さな起伏がいくつもあって、その斜面を利用して窯址群が点在する。安原寺・草間・立ケ花・牛出には窯址のあることが知られ特に草間の茶臼峯・大久保地帯には数十基の窯址群がある。

一〇数年前に土師器の出土を伝えられた西原重美氏（立ケ花）のお宅を訪れ、遺物を調査した時に、四キログラムもある窯滓を出して見せてくださった。部落の道普請の折に穂崎神社裏の道端から拾

ったものであると話された。そこで窯址の所在を知ったわけである。

穂崎神社のある一帯は西北へ緩傾斜する小さな丘陵で良質の粘土の採集できるところである。かつて立ケ花には土瓦工場が沢山あつ



第1図 古窯址分布図

て、高丘村勢要覧を見るとき、明治から昭和初期までは相当地の生産額であった。そして、その材料は立ケ花一帯の粘土を

用い、今も土取りの跡が所々に残っている。「なべ土」「ほうろく原」という地名が残っているのも興味深く、良質の粘土地帯に關係あるものである。

最近、この良質の粘土を磁土として移出し、削平された跡には住宅の新築が目立つようになった。



第2圖 2号窯址発掘状況

緊急発掘調査は中野市教育委員会が主催し、昭和四五年三月二六日から二七日の二日間に実施した。团长は私が担当し、調査員は小林隆輝・田川兼生・檀原長則・興津正嗣・中丸政範・小林徳武・滝沢巖・武田清美・金井文司の諸氏に願ひ。調査協力は中島庄一・高橋均・木沢克己・小林清一・清水秀美・望月静雄・大原正義・金井正三・山本正秀・吉原佳市・田川博和・小林東一郎・田川俊・田川達・大隅京子・海野多美子君等の手によって実施することができた。

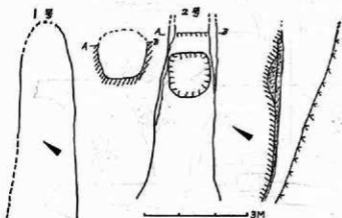
三月二六日(木)晴 午前九時に現地へ集合し、調査についての打ちあわせを行う。打あわせ後、ただちに二号址調査の作業にうつしたが気温が降つたため土は凍ってシャベルを受けつけなかった。とくに窯址北端は一五〇センチの凍土となつていた。またタスキの大株が三個あつて、除去するに半日を費してしまつた。一面にタマサがあつてこれも刈りはらつた。

午後はブルに切り取られた面と、灰原と思われる部分と二班にわかれて発掘をすすめた。灰原部は地表下一〇センチから灰があらわれ、所々に木炭片もまじつていた。地表下二〇センチからは須恵器の破片があらわれてきた。またスサ入りの窯滓も出土しはじめた。午後四時作業をやめる。

参観者北原菊吉・小柳忠治氏はか多数

三月二七日(金)晴 午前九時作業開始。零下四度には閉口した。二号址上で焚火をし、凍土をとかしたが、作業は難渋した。本日は二号址の下方三〇メートルにある一号址の調査も行う。一号址はブ

ルによって雨平されたため全壊に近く、地面に残された焼土が窯
 姿の存在したことを示すだけであった。窯尻には二〇余点の須恵
 器片と土師片とおぼしきものがあった。測量をする。二号址の窯
 底には多数の須恵器片があったが焼成台に使用されたものと思わ
 れた。灰原からは大小さまざまな須恵器片が検出され、蓋のツマ



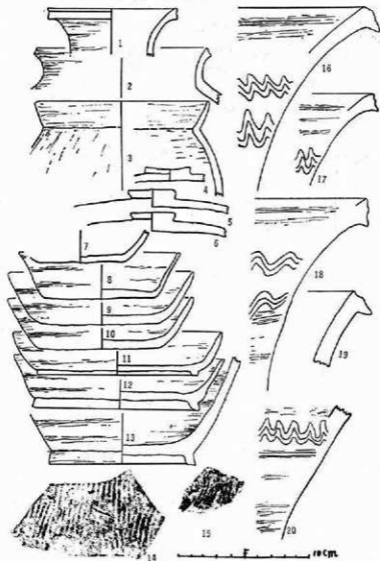
第3図 1、2号窯址実測図

ミには窯印「×」あるものが一点あった。窯長は現在四・二メー
 トル、巾は一・八メートルである。写真撮影をし測量をすませたら
 日没となった。参観者呼上秀雄・小林小衛門・北原秀信氏等多数。

一号窯址は旧県道から約二・五メートル離れ丘陵の中腹下寄りにあ
 って、農道から東へ約一・五メートルの所にあった。ブルのため削平
 されて全貌は明確でないが、焼土の痕跡をたどると長さは五・七メ
 ートル、巾は焼成部で一・四メートルの比較的小形のものであっ
 た。遺構の状況から半地下式平窯であろう。

二号窯址は一号址の上段約三〇メートルの丘陵中腹部にあって、
 西斜面を利用して構築してあった。主体部はブルのため破壊され、
 発掘によって明確になったのは灰原と焼成部および焼成部のほんの
 一部のみで、現長は四・二メートル、最大巾部は一・八メートル
 で、原形は八・九メートル位のものではあるまいか。焚口は炭を挿
 き出したためか一メートルと一・一五メートルの長方形の穴となり
 深さは三〇センチで残された炭はマツ・ナラ・クスギを燃料として
 使用した。焼成部口には高さ三〇センチの段があって、あるいは有
 段式のものかとも考えたが、惜しいことにはブルで切られているた
 め有段式と判定する資料がないため、一応こゝでは半地下式登窯と
 したい。スサ入りの窯滓が灰原から多量に検出し、また残存壁面に
 もスサ入り粘土で補修した跡があった。壁面は一〇〜一五センチに
 きわめて固く焼けているため、この窯は使用度が多かったものと思
 われる。窯高は、壁の残存状態から約一メートルと推定した。天井

第4図 遺物実測図



はドーム形をしていたものと思われる。

一号址の遺物

(第四図 14・15)

は、焼成部入口の右手の所に一括して所在していた。14は大釜の破片で、外側にタタミ目の文様が一面につけてあり、二〇余片の胴部で同じ個体のものである。15は杯の底部破片で糸切底であった。3は土師質の甕の破片である。

二号址の遺物

(第四図 1・13)

16・20)は焼成部・熱焼部・灰原に所在した。1は長頸壺の破片で無文である。2は壺の破片でこれも無文で、小形である。4・6はツマミ付きの蓋の破片で、ツマミの円板は低く扁平だった。またツマミの上面に「×」を竹ペラ印したのもあった。8・10は坏でクロロ目がよく残り、胎土焼成ともかなり良好で、底部にはヘラ起しの痕が残っている。11・12は高台付坏で、高台は低い。13は壺で高台付きの胴部以下の破片である。1に接続するかとも推定される。16・20は大甕の破片である。クシ状工具で波状文をめぐらせているが、なかに一条または二条の沈線で区切っているものもある。18の破片には文様は見られないが、頸部の下方にクシ目文が着けられたものと思われる。なかに自然釉のじみ出ているものもあって、胎土焼成とも良く、光沢がある。二号址の遺物も完形品は無く、大甕破片八〇余点、壺破片五〇余点、長頸壺破片五点、坏破片三〇余点、蓋破片四〇点であった。

今回の緊急発掘調査は、一号址は原形をとどめぬまでの大甕、二号址は焼成部を僅少に残し、半壊の状態となっていたため、窯変の

構造は充分に把握できなかった。周辺調査によって、二号址上方約二メートル(旧県道より約七八メートル)の所に二墓の築地があることを知った。これを三号址四号址とし、農道に面した所に遺構がある。三号址の窯床は巾一・八メートル、四号址は巾一・三メートルであって、いずれもほぼ完全に残存しているものと思われる。貴重な文化財として保護する必要がある。

遺物については前述のとおりであるが、これとも、採土のブルですくわれ、ダンプカーで持ち去られたものが多いと思われる。残存の遺物を見ると、一号は糸切底を持つものであることから、九世紀初頭と考え、二号址のものはヘラ起し底であることから八世紀末葉と推定したい。特に二号址のものは、草間大久保一・三・四号窯址の遺物に類似している。

以上不備のまま調査の概要を述べ、何等かの参考にしていただくところがあるとすれば幸甚のいたりである。(日本考古学協会員)

- 1、大川清・金井汲次「長野県中野市草間窯業遺跡」信濃一六巻 一一号

- 2、中野市教育委員会「安原寺」第七節窯址の調査(金井汲次)

